

『航米日録』における施設語彙をめぐって

——語構成の観点からみる三字漢語——

陶 萍

1 はじめに

安政5年(1858)日米両国間で締結された修好通商条約の批准書交換のため、正使として外国奉行新見豊前守正興等一行76人が渡米した。その際、新見の従者としてアメリカに渡ったのが玉虫左太夫(以下、「玉虫」とする)である。万延元年(1860)、日本に帰国した玉虫はアメリカでの見聞を『航米日録』にまとめた。

『航米日録』は全8巻からなる。その内容は1860年1月18日江戸品川における米船ポーハタン号への乗船に始まり、サンフランシスコ、パナマを經由してワシントンに至り、批准書を交換して目的を果たした後、大西洋、アフリカ南端、インド洋を経て、バタビヤ、香港に寄港し、9月28日に帰国するまでの日記体の紀行文である。玉虫は従者であるため、公式の儀式や会合には出席することが少なかったが、それ以外の場合については同行し、細やかな観察力をもって記録を残している。彼の日録は約8ヶ月余に渡っているが、一日の欠落もなく、その記録対象は、旅先の地勢、気候、風土はもちろん、現地人の生活習慣、衣食住、産業の状態、さらには、生物、物価、貨幣、草木などにも及んでいる。

本稿では、こうした『航米日録』中の語彙、中でも、「庖厨所」「衣服肆」「写真局」などの施設の名称を表す三字漢語に注目したい。森岡健二(1991)¹⁾は、明治期の訳語は大部分が漢語であると指摘し、明治期の訳語として登場する漢語の構造や特質を研究している。また、永井崇弘・他(2001)²⁾などが指摘しているように、日本語で外来の物や思想を表すには、「原語に似た形で取り入れて外来語とする場合と、訳語の形にする場合とがある。そのほとんどを外来語で取り入れる現代とは違って、明治期には漢語の形に訳して取り入れることが多かった」と言われている。また、人名や地名は片仮名で表記される場合が多い。当然、海外諸国の事柄を細かに記述した『航米日録』でも、外来の物や思想を表す表現が多数使用されている。『航米日録』に登場する三字漢語³⁾の施設を指し示す語彙(以下、本稿では「施設語彙」と呼ぶ)を分析することによって、玉虫の初めて目にした西洋の施設に対する名付けの基準を探っていく。また、これらの語彙には中国語からの影響と思われるものもあるので、中国語との関係についても考察していく。施設語彙という狭い範囲からでも玉虫の接尾辞の使い分けによる意味分類の意識の一斑を検討したい。そこに玉虫の意味世界を区分する意識の有様を認めることができるはずである。

2 調査方法

本稿では『航米日録』における三字漢語の施設語彙を抽出し考察対象とする。調査資料としては、日本思想大系66『西洋見聞集』所収の沼田次郎校注の『航米日録』の本文を用いる。なお、用例の所在も巻と頁を記した。

『航米日録』における三字漢語の施設語彙の全体像を概観するため、ここでは主として、三字漢語の施設を表す接尾辞的な語群を11類（～所、～場、～館、～堂、～楼、～院、～店、～舗、～局、～肆、～閣）に大別しておく。接尾辞の使い分けによって、玉虫の名付けの基準を考察するためである。考察するにあたって、『日本国語大辞典』（第二版）⁴⁾（以下『日国大』とする）と『漢語大詞典』⁵⁾（以下『漢詞』）によりながら比較し、その後、玉虫と同時代の日本の見聞記録及び中国の地理書と比較する。

3 接尾辞を伴った施設語彙の特徴

『航米日録』（巻1～巻8）を調査した結果、施設の名称を表す三字漢語の用例は延べ104例である。各巻における用例数は表1の通りである。

表1 各巻における施設語彙（三字漢語）の用例数

巻	巻1	巻2	巻3	巻4	巻5	巻6	巻7	巻8
用例数	11	9	14	25	27	1	16	1
合計	104							

表1のように、施設語彙は各巻に出現している。但し、巻6と巻8における用例が極めて少なく、それぞれ1例⁶⁾しかない。巻6の前半では「上陸セズ、亦問フ所ナシ」と書かれ、後半でも上陸の機会が少なかったため、現地の施設などに触れる機会も少なかったと考えられる。一方、巻8は「秘書」であり、次に示すように、公式の記録に対して、玉虫個人の覚え書きとなっており、心情を述べることに中心がある。故に施設語彙の登場も少なかったのであろう。

予扈從ノ間時ニ臨ミ事ニ触レ、大ニ心ニ感ズル所ニシテ、譚忌ヲ避クベキ者アリ、亦直ニ之ヲ記ス。今再ビ考校シ来リテ之ヲ視ルニ、公然之ヲ言ハ固ヨリ不可ナリ、全然之ヲ削去ルモ亦惜ムベキヲ覚ユ。此ニ因テ別ニ之ヲ抄出シ、此一巻ヲ得、又以テ後ニ付ス。敢テ他人ニ示スニハ非ズ。

巻1から巻8にあった施設語彙の種類を調査した結果、異なり全部で51種である。用例数の多い順に次の表2にまとめた。

表2から分かるように、国家機関（例：「議事堂」）や、公共施設（例：「育幼院」）から身近な施設（例：「(衣服)洗濯所」）に至るまで、玉虫は多種多様な場所を訪問ないし伝え聞いていた。では、これらの施設語彙にはどのような特徴が見られるのか。次節では接尾辞による施設語彙の意味特性、及び玉虫の表現意識による名付けの基準を詳しく分析する。

表2 巻1から巻8における施設語彙

No	施設名称	用例数	No	施設名称	用例数
1	製造所（製造所 1. 製造処 1）	10	27	曲芸所	1
2	庖厨所（庖厨処 1）	9	28	手曲所	1
3	浴場所	7	29	細工所	1
4	議事堂	6	30	選議所	1
5	売買所	5	31	印出所	1
6	休息所	4	32	波止場	1
7	講武場	4	33	工作場	1
8	応接所	3	34	観物場	1
9	止宿所	3	35	物揚場	1
10	乗船場	3	36	貯蓄場	1
11	写真局	3	37	鑄造場	1
12	郷学館	3	38	着船場	1
13	待遇所	2	39	育幼院	1
14	洗濯所	2	40	濟貧院	1
15	着岸場	2	41	雑貨店	1
16	県学館	2	42	骨董店	1
17	議事閣	2	43	金銀舗	1
18	博物所	1	44	大学館	1
19	碇泊所	1	45	瘋癲館	1
20	紡織所	1	46	芸術館	1
21	観物所	1	47	天主堂	1
22	浣濯所	1	48	音楽堂	1
23	活板所	1	49	避暑楼	1
24	監察所	1	50	望火楼	1
25	結髪所	1	51	衣服肆	1
26	鉛字所	1		合計	104

4 接尾辞の観点からみる三字漢語の施設語彙の分析

ここでは、接尾辞的な役割をしている語群が複合語を構成する際の特徴を見る。使用範囲の広さ（多くの漢語につく順）により、「～所、～場、～館、～堂、～楼、～院、～店、～舗、～局、～肆、～閣」の順に分析していきたい。

表3の通り、施設語彙の語尾が「～所」による対象は全23種ある。「～所」は施設語彙の中で、最も多く用いられている接尾辞である。『日国大』では「1. ところ。ばしょ、ありか。2. 特に設けられた場所」とあり、『漢詞』では「1. 処所、地方。（場所、ところ。7）2. 用作官衙或公家其他辦事機構的名称。（国家機関又は公のことが行われる場所の名称に用いる。）」とある。

4.1 「～所」

表3 「～所」をもつ施設語彙

No	～所	用例数
1	製造所 (製造所 1, 製造処 1)	10
2	庖厨所 (庖厨処 1)	9
3	浴場所	7
4	売買所	5
5	休息所	4
6	応接所	3
7	止宿所	3
8	待遇所	2
9	洗濯所	2
10	博物所	1
11	碇泊所	1
12	紡織所	1
13	観物所	1
14	浣濯所	1
15	活板所	1
16	監察所	1
17	結髪所	1
18	鉛字所	1
19	曲芸所	1
20	手曲所	1
21	細工所	1
22	選議所	1
23	印出所	1
	合計	59

23種の語彙を見ると、「博物所、活板所、鉛字所」(名詞+ところ)以外のものは、何れも「～(を)するところ」の意を表し、つまり、「～所」の直前にくる単語はほとんど動作性を持つ単語である。例えば、「売買所」は「売買する+所」、「洗濯所」は「洗濯する+所」と分解でき、複語構造となっている。しかし、2「庖厨所」と3「浴場所」、この2種だけは性質が異なる。「～所」の直前にある「厨」と「場」には既に「料理する+場所」「入浴する+場所」の意が含まれているにもかかわらず、玉虫がさらに「所」を加えて使用しているのである。

- (1) 鱸ノ方ハ庖厨所及ビ水夫ノ休息所ナリ。(巻5. P145)
- (2) 待遇所後左ニ当リ浴場所アリ、長サ二十三間許ニシテ浴場三個アリ、皆石ヲ量ミテ造ル、其上ニ銅管アリテ水湯ヲ灑ギ入ル。(巻7. P198)

用例(1)の「庖厨所」は構文上、後にくる「休息所」と統一を計るため、「～所」としたのであろう。(2)の「浴場所」は後にある「浴場（入浴する+場）」（実際に入浴するところ）に対し、三つの「浴場」が設置されている施設を表すために、「浴場」に「所」を加えたと考えられる。また、この二語は「庖厨」「浴場」のような元々単独の場所を示す語に、「～所」という接尾辞を結合することによって、「集合施設」（施設の集合体）を表す語を造語していると言えよう。「～所」について、浅野敏彦（2012）⁸⁾では、「『所』は、左太夫が見聞した新しい建物を記述するために多用されている造語力の強い漢字として用いられている」と指摘している。

4.2 「～場」

表4 「～場」をもつ施設語彙

No	～場	用例数
1	講武場	4
2	乗船場	3
3	着岸場	2
4	波止場	1
5	工作場	1
6	観物場	1
7	物揚場	1
8	貯蓄場	1
9	鑄造場	1
10	着船場	1
	合計	16

表4の通り、施設語彙の語尾が「～場」による対象は全10種ある。「～所」の次に多く用いられている接尾辞である。『日国大』では「事が行なわれるところ。ばしょ。ば。」とあるのに対し、『漢詞』では、「1. 処所，多人聚集或事情發生的地方。（場所，多くの人が集まる，事件が起こる場所。）2. 指表演技藝的空地。（技芸をする空地。）」とある。

『航米日録』における例の一部を示すと、以下の通りである。

(3) 此地已ニ金礦アリ，又市街ニ廣大ナル鑄造場ヲ設ケ，暫時ニシテ許多ノ貨幣ヲ鑄造ス。（巻2. P60）

(4) 辰牌小船ニ乗り，一里許ニシテ波止場ニ至リ上陸ス。是処ハ石壇ニシテ高サ纔ニ三層ナリ。陸上ハ左ハ隙地ニシテ物揚場ナリ。（巻7. P211）

10種の語彙を見ると、何れも「～が行われるところ」の意を表している。動作性を持つ点においては、「博物」「活板」「鉛字」といった非動作性の名詞が含まれていた「～所」よりやや強いと言えよう。また、「休息所」「応接所」「洗濯所」「結髪所」など「～所」を用いて表された施設よりも、「鑄造場」「波止場」「(煤石)貯蓄場」「着船場」など「～場」を用いて表された施設のほうが規模的、空間的に広い印象を受ける。

また、4.1「～所」と4.2「～場」において、同じ語基の語が1例見られた。用例を示すと次の通りである。

- (5) 唯旅館前ニ毎朝来リテ蔬菜ノ類ヲ街グラ見ルノミ。皆車ニ載ス、負担スルモノナシ。又浮舗アリ、飯食ノ類ヲ売ル。其他戯場・曲芸観物所アリ。(巻5. P141)
- (6) 市街観物場ニシテ熊・羆・虎・獅或ハ猿猴ノ類ヲ見ル。此地ノ産ナルヤ否ヲ知ラズ。(巻5. P142)

語基は同じく「観物」であるが、(5)の「曲芸観物所」のように、曲芸を観るところの意を表し、以下に示した(7)の「曲芸所」はその省略形であろう。一方、(6)の「観物場」は文脈からみると「動物園」を指している可能性が高い。中野美代子(1993)⁹⁾では「日本にはそのころまだ動物園は存在せず、欧米各地ではじめて動物園を見学した幕末から明治初年にかけての日本人が、動物園に該当する欧米のことばに区々たる訳語を対応させていた」と指摘している。このことから、(6)の「観物場」は玉虫によって臨時的に造られた三字漢語の可能性が強いと考えられる。

- (7) 街郭極メテ広大、道衢至テ製生ニシテ、学校・病院・芸術館・寺院・音楽堂都テ備ラザルコトナク、又四達ノ地ニハ戯場・曲芸所・骨董店等列布シテ人常ニ相集ル。(巻7. P202)

4.3 「～館」

表5 「～館」をもつ施設語彙

No	～館	用例数
1	郷学館	3
2	県学館	2
3	芸術館	1
4	瘋癲館	1
5	大学館	1
	合計	8

表5の通り、施設語彙の語尾が「～館」による対象は全5種ある。『日国大』では「1, 貴人や豪族, 国司などの宿舎や邸宅。やかた。たち。2, えいがかん(映画館)」の略。」とある。一方、『漢詞』では、「1. 客舎, 招待賓客居住的房舎。如: 賓館, 旅館。(賓客を招待する家屋。例: ホテル, 旅館。) 2. 旧時私塾。(昔は塾師が講義する場所を指す。) 3. 儲藏, 陳列文物或进行文体活動的場所。如: 博物館, 展覽館, 体育館。(文化財を保存・陳列したり, 文化的活動を行ったりする場所。例: 博物館, 展覽館, 体育館。) 4. 供客人飲食娛樂の場所。如: 菜館, 茶館, 劇館。(お客様に飲食・娛樂を提供する場所。例: 料理店, 茶屋, 芝居小屋。)」のように4つに分類している。

『航米日録』における用例を示すと次のようである。

- (8) 学費ハ郷学館・県学館アリ。郷学館ハ郷中ノ富者費ヲ出シテ師ヲ迎へ、一郷ノ子弟ヲ教ヘシム〈文字・言語英国ニ異ナラズ〉。(中略) 県学館ハ県中ノ人官ニ願フテ之ヲ立ツ。或ハ官ニ於テ公ニ建ルモアリ。其教郷学館ニ比スレバ稍大ナリ。(巻5. P149)
- (9) 大学館ハ毎部ニアリテ、已ニ挙ニ中リタル者ノミ入ルヲ許ス。其学ブ処三科アリ、一ハ聖文、二ハ医法、三ハ律令・規條ナリ。(巻5. P149)
- (10) 又瘋癲館アリテ瘋癲ノ者ヲ世話ス、凡テ館中ニアルモノハ毎歳衣服等ヲ与へ、以テ人オヲ造就ス。(巻5. P150)

5種の語彙を見ると、何れも「名詞+館」という構造で、「名詞」部分は公共的な施設を表している。また、「芸術館」以外の、「郷学館」「県学館」「大学館」が教育施設であることは言うまでもないが、「瘋癲館」も「人オヲ造就ス」とあるように、精神的な疾患のある者に対し、世話をしながら教育をも行う施設である。『漢詞』2にあげた通り、中国の明の時代¹⁰⁾から「～館」は教育施設を表す語として用いられており、玉虫の名付けには中国語と共通する面がよく認められる。

4.4 「～堂」

表6 「～堂」をもつ施設語彙

No	～堂	用例数
1	議事堂	6
2	音楽堂	1
3	天主堂	1
	合計	8

表6の通り、施設語彙の語尾が「～堂」による対象は全3種ある。『日国大』では「大きな建物」とあり、『漢詞』では、「1. 指旧時官府議論政事，审理案件的地方。(旧時官庁は政務を行ったり，事件を審理したりする場所を指す。) 2. 用于庁事，書齋名称。(官庁の大広間や書齋の名称に用いる。)」としている。

『航米日録』における用例を示すと以下の通りである。

- (11) 已後御奉行等議事堂ニ行ク、予陪扈スルヲ得ズ、午後帰館セラル。(巻3. P99)
- (12) 街郭極メテ広大、道衢至テ製生ニシテ、学校・病院・芸術館・寺院・音楽堂都テ備ラザルコトナク、(巻7. P202)
- (13) 尤其女僧ハ常ニ十字木ヲ腰辺ヘ帶ブ。天主堂ヘ入レバ腰ヲ屈シテ礼拝シ居ル。(巻4. P105)

3種の語彙を見ると、「議事堂・音楽堂・天主堂」は共に多人数がある目的のために集会する施設である。また、「議事+堂」の例が最も多く、『漢詞』の定義1の通り、中国語で「～堂」は後漢時代の文献¹¹⁾から「政治のことを議論したりする場所」として用いられた例が存在して

いる。一方、「音楽堂」と「天主堂」はそれぞれ1例ずつあり、これは「名詞+堂」という構造になっている。

4.5 「～楼」

表7 「～楼」をもつ施設語彙

No	～楼	用例数
1	避暑楼	1
2	望火楼	1
	合計	2

表7の通り、施設語彙の語尾が「～楼」による対象は2種である。『日国大』では「高い建物、料亭・旅館、また、妓楼などの名の下に添えて用いる」とあり、『漢詞』では「1. 兩層及兩層以上の房屋。(二階及び二階以上の家屋。) 2. 城牆或土台上的建築物。(城壁又は土台の上にある建物。) 3. 車、船有上層者、其上層称楼。(車や船の上の方にある階を楼と称する。) 4. 茶肆、酒店、歌舞厅及旧時妓院等场所也称楼。(茶肆、酒店、ダンスホール及び旧時の遊廓などの場所。)」と4分類している。

『航米日録』における用例を示すと以下の通りである。

- (14) 中央ニ長サ十間ノ巨大ノ楼高岸ニ傍フテアリ、船中ヨリ之ヲ望ム、尚分明ニ見ユ、是避暑楼ナリト云フ。(巻3. P91)
- (15) 又旅館ヨリ東南少許隔テ如此キ高楼アリ、是望火楼ト云フ、高サ数十丈ナリ。(巻5. P140)

2種の語基は何れも動作性を持つ語彙である。用例(14)「長サ十間ノ巨大ノ楼高岸ニ傍フテアリ」から「～楼」は高い建物であることが分かる。また、用例(15)「高サ数十丈ナリ」のように、「避暑楼・望火楼」は少なくとも二階以上の施設であることが窺える。そのうちの「望火楼」について、浅野敏彦(2011)¹²⁾は次のように指摘している。「望火楼」は、『漢語大詞典』では、古代の例はなく宋の時代の「東京夢華録」の例(又於高處磚砌望火楼、楼上有人卓望)をあげて、「猶今消防瞭望塔」としている。(中略)この語は近世中国語の可能性があることになる」。やはり近い時代の中国語の文献との関連が考えられる。

4.6 「～院」

表8 「～院」をもつ施設語彙

No	～院	用例数
1	育幼院	1
2	濟貧院	1
	合計	2

表8の通り、施設語彙の語尾が「～院」による対象も2種である。「～院」について、『日国大』では「多く国家の施設、機関の名に付ける語」とある。一方、『漢詞』では、細かく4つに分類している。「1. 指寺院、佛寺。（寺院、仏寺を指す。）2. 妓楼、妓院。（妓楼、遊郭。）3. 読書講学の処所。（読書、講義する場所。）4. 某些機構和公共処所の名称。（公共機関と公共の場所の名称。）」である。

『航米日録』の用例を示すと以下の通りである。

- (16) 又育幼院アリ、幼ニシテ父母ヲ失フ者ヲ養ヒ教ユ。都テ幼ヲ教ユルニハ三歳頃ヨリ人体ノ名目万国ノ名目ヲ教ユルナリ。（巻5. P150）
- (17) 故ニ今ニ至リ知識益開ケ、天文・地理・術数悉ク研究セザルナク、貧人ヲ濟フニハ予メ防テ貧カラザラシム、其已ニ貧キ者ハ之ヲ濟テ愈貧カラザラシム。之ヲ防グノ法大抵人ノ雇工トス、若シ人雇フモノナケレバ、本県ニ濟貧院ヲ設ケテ是ヲ居キ、各其職業ヲ分チ働カシム。（巻5. P150）

2種の語彙は、何れも公的な性格を有する施設である。(16) (17) の用例「三歳頃ヨリ人体ノ名目万国ノ名目ヲ教ユルナリ」「知識益開ケ、天文・地理・術数悉ク研究セザルナク」を見ると、「育幼院」と「濟貧院」は孤児や貧人を養いながら教育もしている施設であることが分かる。『漢詞』3にあげた通り、「～院」は教育的側面を持つ語であり、中国の宋の時代には教育施設としての「書院」¹³⁾の用例が見られる。また、佐藤亨(1980)¹⁴⁾では、「病院」なる語は、「貧院」「幼院」とともに中国で訳出されたものであって、わが国でつくられた訳語ではない」と指摘されている。今回の調査は三字漢語を中心に考察したが、『航米日録』に「貧院」「幼院」「病院」のような二字漢語も見られる。そのうちの「病院」については、佐藤氏が「養病院」の省略形であろうとしている。ここまでくると、玉虫のものが近い時代の中国語の影響を受けている可能性が高いと考えざるを得ないであろう。

4.7 「～店」

表9 「～店」をもつ施設語彙

No	～店	用例数
1	雑貨店	1
2	骨董店	1
	合計	2

表9の通り、施設語彙の語尾が「～店」による対象も2種ある。『日国大』では「品物をならべて商売をするところ。みせ」とある。一方、『漢詞』では「1. 商店。（商店）2. 旅店、客店。（旅館、宿屋）」とある。

『航米日録』の用例を示すと以下の通りである。

- (18) 市街多ハ旅館或ハ酒舗ナリ、雑貨店至テ少ナシ。（巻3. P75）

(19) 又四達ノ地ニハ戯場・曲芸所・骨董店等列布シテ人常ニ相集ル。(巻7. P202)

2種の語彙を見ると、「商品(名詞)+店」(「雑貨+店」「骨董+店」という構造で、「商売をする所」の意を表している。

4.8 「～舗」

施設語彙の語尾が「～舗」による対象は「金銀舗」の1種しかない。『日国大』と『漢詞』はどちらも「店舗、みせ」の意を表している。

(20) 今辰時ヨリ御奉行等当所金銀舗ニ行ク。何事タルヤ知ラズ。或説ニ、我国ノ二朱金ヲ分析シ其位ヲ定ムト云フ。(巻4. P125)

「金銀舗」は「金銀+舗」という構造で、「商売をするところ」の意味においては、「～店」と同じような働きをしていると思われる。しかし、(20)の「金銀舗」については、本文に「造幣局」¹⁵⁾という校訂者による注釈がある。この注釈によると、「金銀舗」は「店」の意味ではなく、公的な機能を果たす場所を表していることが分かる。「金銀舗」は『漢詞』に立項されていないが、中国南宋時代の孟元老が撰した回想録『東京夢華録』巻二¹⁶⁾に「大街以東南則唐家金銀舗温州漆器什物舗」との用例が見られる。「何事タルヤ知ラズ」から、玉虫は「造幣局」の実態が分からず、「或説ニ、我国ノ二朱金ヲ分析シ其位ヲ定ムト云フ」の情報から「貨幣を扱うところ、つまり、一種の店である」と判断したことが推測できる。

4.9 「～局」

施設語彙の語尾が「～局」による対象も「写真局」の1種である。『日国大』では、「1. 役所などの、事務の一区分。また、それを担当する部署。2. 郵便局、電話局、放送局などの略称」とあるが、『漢詞』では「1. 指官署、機構。(官署、機構を指す。) 2. 店舗。(店舗。)」としている。

(21) 乃チ案内シテ写真局ニ連レ行ク。(中略) 兩人ヲ別房ニ案内シ真ヲ写ス。其奇巧筆ニ尽シ難シ。始メ別房人ナキ所へ兩人ヲ並べ置キ、其傍ニ暗室アリ。其処ニ入り、硝子(客ノ好ミニ随ヘ大小アリ。予等ノ真ヲ写セシ硝子ハ長サ二寸横一寸)ニ薬ヲ兩次滴ラシ、箱ニ入レ置ク。是レ薬ヲ乾ス為メナラン。暫シテ此ヲ取り出ス。(巻1. P27)

『日国大』では「店舗」の意が見られないが、『漢詞』では、宋・元の時代から「坐局沽酒」「生薬局」¹⁷⁾の用例が掲載されている。「真ヲ写ス」「奇巧」「硝子ニ薬ヲ兩次滴ラシ」などから、「写真局」は生産過程を行う「局」くらいの意味であろう。この点においては「生薬局」の用法に類似していると考えられる。

4.10 「～肆」

施設語彙の語尾が「～肆」による対象は「衣服肆」の1種である。『日国大』と『漢詞』はど

ちらも「店舗、みせ」としている。

- (22) 衣服肆尤巨大，每階品ヲ分ツテ売買ス，千種万品枚挙スベカラズ，目ヲ驚スノミナリ。
(巻 5. P135)

辞書の定義，及び「商品 + 肆」という構造で，「～店」「～舗」と同じように「ものを売買するところ」を示していることが分かる。

4.11 「～閣」

施設語彙の語尾が「～閣」による対象は「議事閣」の1種である。『日国大』では「たかどの。りっぱな御殿」とあり、『漢詞』では「1. 楼閣。(楼閣，高い建物。) 2. 古代中央官署名。内閣之略称(古代中央官署名。内閣の略称。)」としている。

- (23) 副統領辞スレバ議事閣高官ノ者ヲ以テ順立セシム是皆辞スレバ，大統領ノ隠居セシモノヲ再挙スト云フ。(巻 5. P148)

4.4で「議事堂」について触れたが、『漢詞』2により，「政治のことを議論したりする場所」として「～堂」も「～閣」も使えることが分かる。

以上，三字漢語の接尾辞語群から，玉虫の施設語彙の名付け基準を検討した。玉虫は，西洋近代の事物概念を摂取する過程で，各接尾辞の意味相違を利用して，施設語彙を区分したと考察できた。こういった異なる接尾辞を使うことによって，施設の様々な性質を表し分けていたのであろう。訳語の定まらない語に関しては，接尾辞の意味についての判断も伴ったことであろう。

しかし、『日国大』と『漢詞』との比較だけでは，施設語彙の命名に玉虫の漢語による教養が存在しているとは十分に言えない。『航米日録』における施設語彙の使い分けは玉虫の独特の用語基準か，それとも漢語の教養によるものか，又は当時の一般的な教養によるものかを考察するために，次の第5節で幕末から明治にかけての外国を見聞した日本の記録に見られる施設語彙，第6節で当時の中国の地理書に記載されている施設語彙と比較したい。

5 外国を見聞した日本の記録との比較

本節では，玉虫の使用した施設語彙が当時の日本語として通常のものであるか否かを考察するために，次の諸資料『広八日記』¹⁸⁾『世界国尽』¹⁹⁾『西洋事情』²⁰⁾を用い，比較していく。

5.1 『広八日記』

『広八日記』は，幕末から明治にかけ曲芸団を率いて米欧を巡業した「広八」という人物による巡業日誌である²¹⁾。広八ら曲芸団一行が日本を出発したのは玉虫の使節団と同じ時代の慶応

2年（1866年）であり、施設に関する用例（括弧内は筆者による）を示すと次のようである。

- (24) 今日は船のりかいはの所（場所）なり、是にあかり、此処ハくろしん国と申て同あめりか国のうちなり、(P10)
- (25) 此朝六時ニ入要達と申て、あめりか壺のよき処い付候、馬車四つにて町々内式り程のりて泊りやい付候なり、此みなとの船つく場所と申るハ、船にて船よりあかる用にみなとをこしらい、是めずらしきしかけなり。(P12)
- (26) 是ハ式尺まわりほとにして、日本のへびよりハなかみハばいあるなり、(中略) 是ハ中々もつて壺日や二日にみきれ申さづ、是大きな見物の場所なり。(P28)
- (27) そんな礼うしころしにて、興行中入にて候、此うしころしとゆふ事ハ、うしころしの場所をかりてするのを、うしころし興行とわれ／＼共がゆふことハに御座候なり。(P69)

用例のように、『広八日記』においては、漢語で施設語彙を表す例が殆ど見られず、「船のりかえの場所」「船つく場所」「見物の場所」「うしころしの場所」のように、「～する場所、～の場所」という表現が多い。「うしころしの場所」（スペインの「闘牛場」）の表現は『航米日録』には見られないが、「船のりかえの場所」「船つく場所」「見物の場所」については、玉虫は「乗船場」、「波止場」「着船場」、「観物場」といった表現を使用している。前者は平常語を用いた説明的な表現、後者は漢語的な表現であり、両者の間には明らかな差異が見られる。こうした差から、当時平常語を用い、説明的に記述するグループと漢語的な表現を用いて記述するグループがあったと言えるのではないか。前者は庶民、後者は知識人と言え、玉虫は後者のグループに属する者であったのだろう。

5.2 『世界国尽』

『世界国尽』は、福澤諭吉の著書の一つである。1869年（明治2年）の初冬に発行され、当時の日本における世界地理の入門書と言われている。地理以外に、その国の歴史を説明している箇所もある。三字漢語の施設語彙は8例見ることができる。例の一部を示すと次の通りである。

（奉行所1 学問所1 学文所1／交易場5／議事院1／政事堂1）

- (28) 広大ハ世界万国比類ナシココニ名高キ奉行所ハ西国筋ニ戸保留須喜<トボルスキ>東国筋ニ伊留久須喜<イルクスキ>南境ノ喜阿久田<キアクタ>ハ売買城<パイパイジャウ>ニ隣シテ産物ヲ互ニ易ル交易場東へ廻リ黒竜江<コクリョウカウ>江尻ニ立テシ(P4)
- (29) 尽シ都鄙ノ差別ナク諸方ニ建ル学問所幾千万ノ数シラズ。(P9)
- (30) 共和政人民凡五十万議事院タテテ事ヲ議シ。(P6)
- (31) 其中心ハ和新頓<ワシントン>府内ニ開ラク政事堂高サ二百八十尺衙門楼閣巍々トシテ結構ノ見ル所ナシ(P19)

用例のように、接尾辞「～所・～場・～院・～堂」で終わる三字漢語が見られる。接尾辞の

種類は『航米日録』ほど多くないが、玉虫の名付け基準と矛盾しないことが分かる。この時代の知識人に共通している表現構造であると言えよう。

5.3 『西洋事情』

『西洋事情』は、福沢諭吉が幕末から明治にかけて著した書物で、当時の欧米の状況を紹介したものである。初編3冊、外編3冊、2編4冊の10冊からなり、それぞれの刊行年は1866年（慶応2年）、1867年（慶応3年）、1868年（明治元年）である。『西洋事情』に見られる三字漢語の施設語彙は189例であり、例の一部を示すと（32）～（41）の通りである。

（貸附所1 平議所1 裁判所10 製作所1 製造所1／博覧場3 飛脚場10 波戸場2 工場1 貿易場2 造船場1／棄兒院3 痴兒院2 議事院104／博物館8／議事堂1／海軍局3 陸軍局1 軍務局2 会議局2 評議局2 議事局3 会計局2 賑給局1 外国局1 裁判局14 造船局3 紙幣局1 製造局3）

- (32) 衆人ノ評議ニ從テ之ヲ罰スルコトアリ或ハ裁判所ヲ設テ罪ヲ決断スルコトアリ（外篇 卷1. P9）
- (33) 瓦斯ニ於テハ此法ヲ施シ難シ元来瓦斯ノ仕掛ハ一局ノ製造所ト一条ノ管トヲ以テ（外篇 卷2. P43）
- (34) 都会ニ博覧場ヲ開ク間ハ諸邦ノ人皆是ニ輻湊シテ一時都下ノ繁昌ヲ致ス千八百六十二年竜動ニ博覧場ヲ設ケ毎日場ニ入ルモノ四毎万人ニ下ラス（初篇 卷1. P44）
- (35) 所謂飛脚印ヲ売ル政府ノ飛脚場ニハ非ラス大抵市中一町毎ニ箱ヲ戸外ニ出セル家アリ此箱ニ書翰ヲ投シ漸ク集レハ同時ニ之ヲ諸方ヘ送ル但シ此飛脚屋ハ政府ノ飛脚場ニ属スル（初篇 卷1. P12）
- (36) 貧院ノ内、孤院ト称スル院アリ貧兒ノ父母ナキ者ノミヲ集メテ養フ所ナリ又棄兒院ナルモノアリ貧人ノ子ヲ養フコト能ハサルモノ（初篇 卷1. P36）
- (37) 痴兒院ハ兒童ノ天稟智恵ナキモノヲ教ユル学校ナリ讀書算術等ヲ教ユルモ尋常ノ学校ト同シカラス（初篇 卷1. P40）
- (38) 博物館ハ世界中ノ物産古物珍物ヲ集メテ人ニ示シ見聞ヲ博クスル為メニ設ルモノナリ「ミネラロジカル、ミュチエム」ト云ヘルハ磁品ヲ集ムル館ナリ（初篇 卷1. P41）
- (39) 国内常ニ穏静ナラス但シ議事堂ノ法ヲ脩メ上下両院ヲ一和セシメタルハ在位中ノ大功ナリ（初篇 卷3. P41）
- (40) 不在又ハ病氣ノトキニ本官ヲ勤ルモノナリ奉行管轄ノ地ニハ必ス会計局ヲ立テ国帝私有ノ地ヲ支配シテ貢稅ヲ収ム其長官ハ即チ副奉行ナリ又賑給局ナルモノアリ此局ノ職務ハ救窮ノ法ヲ監督シ牢獄製造局ヲ支配シ貧民教育ノ学校ヲ指揮ス。（二篇 卷2. P32）
- (41) 錢貨出納 軍務局 一億零六百五十七万五千八百九十二「ル-ブル」
人民教育 四百十五万六千八百二十四「ル-ブル」
海軍局 二千零五十八万九千八百三十一「ル-ブル」
裁判局 五百五十万二千八百九十六「ル-ブル」（二篇 卷2. P50）

用例のように、接尾辞「～所・～場・～院・～館・～堂・～局」で終わる三字漢語が見られる。語構成においては、玉虫と共通している表現が多い。また、『西洋事情』においても、玉虫と同様に「裁判所・裁判局」「議事院・議事堂・議事局」のような表現のゆれが見られる。

以上、『広八日記』『世界国尽』『西洋事情』と比較した結果、広八には「船つく場所」「見物の場所」のような表現が多く、単語全体を漢語とする表現はほとんど見られない。一方、福沢諭吉と玉虫には表現上の類似が見られ、共通している語彙も多いことから、福沢諭吉同様、玉虫も漢籍に精通していたと考えられる。そして、『航米日録』における三字漢語の施設語彙は玉虫の独特な表現法ではなく、少なくとも幕末・明治初期の知識層に共通する素養、つまり、漢語の知識によって生み出されたものと考えられることができるだろう。この論点に関連して、松井利彦（1980）²²⁾では、「近代漢語とみなされる漢語がほぼ同時期の数種類の文献に現れれば、その近代漢語は個人が臨時的に偶然に用いたのではなく、ある程度の範囲において通用していたと考えてよい」との指摘もある。

6 中国の地理書との比較

湯浅彩央（2013）²³⁾では、『航米日録』における「アメリカ」を表す表記として、最も多く使われているのは「花旗国」「花旗」であり、中国からもたらされたと指摘している。このように、『航米日録』における外国地名には中国語化の傾向が窺えるが、施設語彙も中国語の影響を受けている面があろうか。

本節では、『航米日録』における施設語彙の命名に上述のような面があるか否かを考察する。こうした場合、例えば清末の中国からの遣欧使節たちの報告の『從東方到西方一走向世界叢書叙論集』²¹⁾との比較が有効であろう。これは玉虫が外遊したのとほぼ同時期の1840～1911年に欧米や日本を訪問した中国人による見聞録である。そこに見える三字漢語の施設語彙の用例の一部をあげると、次の通りである。

- (42) 中途過一貧孩院，叩戶人觀之。（中略）院中男女孩凡三百余人。有廚房，有書庫，有浴室，有飯廳，有讀書堂，有講經堂，有做工所，有演藝場，有洗衣所，有男孩臥室，有女孩臥室，秩然不紊。《使西日記》P221
- (43) 園地周環約十裏，又有試馬場，鬥車場，演炮場。《倫敦與巴黎日記》P265
- (44) 論及學館，適其地大學館總教習斯爵樂得在坐，約陪同一遊。《使西日記》P4
- (45) 尚有大學館一，小學館五，內有女學館一，以總督哲威裏約三點鐘答拜，不及往觀。《使西日記》P16
- (46) 徐光啓舍家為天主堂，而其教遍行于天下，未為害也。《使西日記》P30
- (47) 兩議事堂規模略同。惟英國議堂中設巨案，議者案旁立談，些間則立台上，為稍異。《使西日記》P198
- (48) 午刻，同王子顯步至叫貨樓。樓高五層，屋宇百間，共分三十余所。《歐美環遊記》P150

- (49) 轄内皆有養老、育嬰、濟貧等院、與瘡盲跛躄者以工餼食之所。《使西日記》P266
- (50) 午後、明同布氏兄弟往看其兄布威裏之金珠店。《歐美環遊記》P78
- (51) 後至大街壹銀器鋪。《歐美環遊記》P62
- (52) 步遊三路旺街、見雜貨肆中出售孩童玩具暨筆墨、刀錘等物。《歐美環遊記》P219
- (53) 見糖果肆出售蜜栗甚大、藉以銀紙小盤、每雙值一方、計銀一錢三分。《歐美環遊記》P199
- (54) 未正、隨志、孫兩欽憲乘車行八裏、看勒彬鍾表局。《歐美環遊記》P106

用例のように、三字漢語の施設語彙について、中国の地理書では『航米日録』とほぼ同じ語形の用例が数多く存在しており、同様の語構成をしていることが明らかである。一方、『航米日録』には中国の地理書に見られない語彙も存在している。例えば、「望火楼」「衣服肆」などの類である。「～楼」については、中国の地理書で「望楼」、また(48)のような「叫貨樓（オークションを行う場所）」が見られるが、「～楼」が高い建物を指す点においては『航米日録』と同様である。そして、「～肆」については、「衣服肆」は見られないが、「～肆」で終わる語彙を見ると、やはり『航米日録』と同じく「商品+肆」という構造で、「～店」「～舗」とともに「商売するところ」の意を表している。「衣服肆」は「衣服（商品）」に「～肆」という造語要素が結合して、造語されたものと捉えることができる。

以上から、『航米日録』にある三字漢語の施設語彙は語構成の面で、近世中国語の影響を受けながらも、「～楼」「～肆」などの一部の接尾辞の機能が強化され、漢字の新たな結合による派生語も生まれたと言えよう。

7 おわりに

本稿は、『航米日録』における施設語彙を、接尾辞的な語群という観点からその使い分けを考察した。「～所」「～場」などのような接尾辞はそれぞれ固有の意味・機能を表し、異なる接尾辞を使うことによって、施設の特徴・性質などを示すことができたようになったと考える。各種の接尾辞につきその前項の単語との語彙構造を表10にまとめた（○→用例が多い。△→どちらもある。×→用例がない）。

表10 接尾辞と前項の単語との語彙構造

	～所	～場	～院	～店	～舗	～館	～堂	～楼	～肆	～局	～閣
動詞性	○	○	○	×	×	×	△	○	×	×	○
名詞性	△	×	×	○	○	○	△	×	○	○	×

また、三字漢語の施設語彙を中心に、①『日国大』と『漢詞』によりながら、各施設語彙の特徴を分析した。そして、『航米日録』における三字漢語の施設語彙が玉虫の独特の用語基準か、それとも当時の一般的な教養によるものかを考察するため、②当代の外国を見聞した日本の記録と比較した。さらに、これらの施設語彙は中国語の地理書からどのような影響を受けている

のかを見るために、③当時の中国の地理書と比較した。玉虫左太夫と福沢諭吉の施設語彙に共通性が見られることから、玉虫は漢籍の深い知識を有していたと思われる。同時に、『航米日録』において、玉虫が造語した施設語彙は、彼の漢語知識の所産であると言えるだろう。

今回の考察では『航米日録』における施設語彙、特に三字漢語を中心に玉虫の用語基準についての管見をまとめたが、二字漢語については触れていない。例えば、二字漢語の施設語彙に関していえば、「書肆」「酒舗」「馬頭」「衙門」などのように、中国の地理書における使用頻度の高い語、また「圍房」「浮舗」などのように、漢語の可能性が高いが、中国の地理書などではその使用例が見られない語などがある、これらの施設語彙の考察を今後の課題としたい。

注

- 1) 森岡健二 (1991)『近代語の成立—語彙編—』明治書院
- 2) 永井崇弘・岡島昭浩・澤崎久和・李忠啓 (2001)『『西国立志編』の漢字語彙—英語片仮名表記を有する漢字語彙とその索引—』福井大学国語学会『国語国文学』40. pp78-31
- 3) 『航米日録』中の施設語彙には、「旅館」「書肆」「馬頭」「商店」「酒舗」等のような二字漢語も見られる。しかし、これらの語について、例えば「旅+館」「書+肆」のように、「語基+接尾辞」というふうに分解しにくいものも多く、むしろまとめて一語（普通名詞）として捉えられる傾向が強い。従って、今回の調査はこうした可能性のある二字漢語を省き、三字漢語を「語基+接尾辞」という語構成の観点から考察することにした。なお、四字以上の漢語例は極めて少なく、「行李揚場」の一例である。
- 4) 『日本国語大辞典』（第二版）（小学館、2001）
- 5) 『漢語大詞典』（漢語大詞典出版社、1991）『漢語』は大型辞書であり、古代から現代までの語義が連続的に載っており、特に宋代以後の語彙に強いし、『日国大』と対比するのに便利である。
- 6) 巻6は「乗船場」、巻8は「庖厨所」である。
- 7) 日本語訳は筆者による。以下同様。
- 8) 浅野敏彦 (2012)『『航米日録』巻一～巻五の漢字について』『論究日本文学』96. pp1-10
- 9) 中野美代子 (1993)『『米欧回覧実紀』における動物園見学記録と動物観』田中彰・高田誠二編著『『米欧回覧実紀』の学際的研究』北海道大学出版会. pp227-238
- 10) 『警世通言・族陽宮鉄樹鎖妖』：「時有一老者姓史名仁，家頗饒裕，有孫子十餘人，正欲延師開館」。
- 11) 漢・王充『論衡・物勢』：「一堂之上必有論者一郷之中必有訴者」。
- 12) 浅野敏彦 (2011)『『航米日録』の漢語—古代漢語と近世中国語—』坂詰力治編『言語変化の分析と理論』おうふう. pp452-464
- 13) 読書講学的処所。「宋代有白鹿洞書院」。
- 14) 佐藤亨 (1980)『『職方外紀』の語彙とわが国近代漢語との関連について』『文芸研究』95. pp26-36
- 15) 『航米日録』では、「金銀舗」について次のような注釈がある。「造幣局のこと。使節は批准書交換終了後、国務省で貨幣交換率の確定について交渉を行い、また、フィラデルフィアの造幣局で彼我貨幣の比較を実検する目的を持っていた。そのあと使節はニューヨークにおいて邦貨との交換比率について国務長官宛申し入れを行っている」とある。
- 16) 京都大学図書館「中国基本古籍庫」による。
- 17) 宋魏了翁『題復訓鴻軒』：「每愛其集」『坐局沽酒』與『務中晚作』諸詩。元孟漢卿『魔合羅』第一折：「對門兒是個生藥局」。
- 18) 高野広八 (1977)『広八日記—幕末の曲芸団海外巡業記録』飯野町史談会
- 19) 以下の大阪大学文学部・大学院文学研究科によるテキストファイルを利用。
福澤諭吉編 (1869)『世界国尽』<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~okajima/bun/kunidukusi.txt>

- 20) 以下の大阪大学文学部・大学院文学研究科によるテキストファイルを利用。
福澤諭吉編（1866）『西洋事情』初篇 <http://www.let.osaka-u.ac.jp/~okajima/bun/seiyojijo2.txt>
福澤諭吉編（1867）『西洋事情』外篇 <http://www.let.osaka-u.ac.jp/~okajima/bun/seiyojijo.txt>
福澤諭吉編（1868）『西洋事情』二篇 <http://www.let.osaka-u.ac.jp/~okajima/bun/seiyojijog.txt>
- 21) 彦坂佳宣（2003）「ある幕末庶民の米欧体験—『広八日記』の世界のことば—」『論究日本文学』78. pp1-15
- 22) 松井利彦（1980）「近代漢語の定着の一様相」『広島女子大学文学部紀要』15. pp49-60
- 23) 湯浅彩央（2013）「『航米日録』の外国地名表記」『立命館文学』630. pp295-304
- 24) 鐘叔河（1980）『從東方到西方—走向世界叢書叙論集』湖南人民出版社（全20冊）
（1. 康有為『歐洲十壹國遊記』2. 徐建寅『歐遊雜錄』3. 李圭『環遊地球新錄』4. 張德彝『航海述奇』5. 張德彝『歐美環遊記（再述奇）』6. 劉錫鴻『英軺私記』7. 黃遵憲『日本雜事詩廣注』8. 黎庶昌『西洋雜誌』9. 錢單士厘『癸卯旅行記／歸潛記』10. 梁啓超『新大陸遊記（壹）』11. 謝清高『乘差筆記／海錄 斌椿』12. 薛福成『出使四國日記』13. 曾紀澤・李鳳苞『使西日記／使德日記』14. 志剛『初使泰西記』15. 容闈『西學東漸記』16. 王韜『漫遊隨錄／扶桑遊記』17. 蔡爾康『李鴻章曆聘歐美記』18. 戴鴻慈『出使九國日記』19. 張德彝『隨使法國記（三述奇）』20. 羅森等『早期日本遊記五種』）

付記

本稿は、2012年度立命館大学で開催された西洋見聞集研究会シンポジウムにおける口頭発表を加筆・修正したものである。また、西洋見聞集研究会の先生方から有益なご教示を頂いた。記して感謝の意を申し上げる。

